

Management Club Report

Jan.2011/Vol.97

Monthly Opinion 《希望の歯科医療》

新しい2011年を迎えました。本レポートをご愛読いただいている方々はどのような新年をお迎えになりましたか。毎年のことながら、今年は良い年にしたいと決意を新たにしますが、中々思い通りに行かないものです。それでも長いスパンで振り返ってみますと、試行錯誤を繰り返しながら少しずつでも受け入れられ、成長して来ているように思えるのは嬉しいことですし、愛読者の方々もおそらく同じような感慨を抱いている方が多いのではないのでしょうか。

バブルの崩壊以降の社会の停滞はいろいろなところに歪みを生んでいます、歯科医療は年々進歩を遂げ、考え方も取り組み姿勢も健全な方向に向かって確かに歩んでいるように感じられるのは嘘ではないでしょう。

競合先が増え医療制度の限界が懸念されるなか、歯科界の将来は暗いと言われることが多く、希望の持てない業界であるかのように言われてきました。現に今でも歯科大学への入学希望者は減少しています。しかしそのことと歯科界の将来に希望が持てないこととは関係のない現象でしょう。

今月は、新年にふさわしい『希望』について述べて行きたいと思います。

1

神立尚紀氏の『祖父たちの零戦』に学ぶ

戦争を知らない若い作家が描く戦時中の若者

私は最近、太平洋戦争を生き抜いた海軍軍人たちの戦中から戦後に至る苦難を描いたノンフィクションを2冊立て続けに読みました。『凌ぐ波濤』と『祖父たちの零戦』です。間に挟んだ『永遠の0』という小説も含めると、その種の本としては3冊連続となりました。

向は、「また、そんな本読んでいるのですか、アハハ」と馬鹿にして笑っておりましたが、近代史研究家を自認する私としては絶対に外せない3冊だったのです（本当は単なる戦記モノ好きの『少年趣味オヤジ』であるに過ぎないのですが…）。

尤も、私を笑った向も『永遠の0』にはすっかりハマってしまい、出張の合間に読んでは泣いているようです。その向の父親は、実は予備学生出身の元海軍士官でいまだに壮健。アマチュア写真家としてはそれなりに知られた存在で、今でも自家用車を駆っては撮影に出かけるなどエネルギーギッシュな活動を続けているそうです。

『祖父たちの零戦』は、昭和38年生まれで写真週刊誌フライデーの元カメラマン神立尚紀（こうだち・なおき）氏が、存命中の元零戦搭乗員を取材しその重い口を開かせ、丹念に調べ上げた『零戦搭乗員の記録』で、海軍航空隊で活躍した戦闘機乗りの若き日の心意気と緒戦の活躍、終戦間際に特攻機を援護し、敵艦に突入する若いパイロットを